



セヴラック通信

Courrier de Séverac

第20号

2016 前期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

25

第 25 回例会
2016年6月25日 (土)
アコスタディオ

プログラム

例会

13:30-16:00

【演奏】

光永浩一郎：オーボエソナタより第1楽章

Kouichirou Mitsunaga : Oboe Sonata 1st Mov.

モリコーネ (光永浩一郎編曲)：ガブリエルのオーボエ

Ennio Morricone (arr. Kouichirou Mitsunaga) : Gabriel's Oboe

花田朋子 (Ob)、館野 泉 (Pf)

セヴラック：日向で水浴びをする女たち

Déodat de Séverac : Baigneuses au soleil

久保春代 (Pf)

～休憩～

歌劇《風車の心》日本セヴラック協会版

モーリス・マーゲル詩／デオダ・ド・セヴラック作曲

末吉保雄編曲・構成

Poème de Maurice MAGRE / Musique de Déodat de SÉVERAC

extraite et arrangée par Yasuo SUEYOSHI

第1幕 Act 1

～休憩～

第2幕 Act 2

ジャック： 鎌田 直純 (バリトン)

マリー： 森 朱美 (ソプラノ)

粉挽きの老人： 森田 学 (バス)

ジャックの老母： 小阪亜矢子 (メゾソプラノ)

ピエール： 根岸 一郎 (バリトン)

村人たち： 日本セヴラック協会会員有志

館野 泉／久保 春代／水月恵美子／末吉 保雄 (ピアノ)

木村麻衣子 (フルート)／石川絵津子 (フルート、リコーダー)

會田 瑞樹 (打楽器)

懇親会

16:30～

歌劇《風車の心》あらすじ……………	4
サン＝フェリックス・ロラゲの風景……………	6
〈連載〉セヴラック随想（10）●濱田滋郎……………	10
〈連載〉セヴラックと私●藤田彩……………	14
日本セヴラック協会第24回例会の報告●鎌田和夫……………	15
第25回例会プログラム……………	表2

歌劇《風車の心》あらすじ

第1幕

舞台は18世紀末のフランス南西部、ラングドック地方のある村の秋の夕暮れ。葡萄畑が広がり、彼方にピレネーの山並み。村はずれに風車が立ち、丘の上には大勢の村人がパンや葡萄酒を持って集い、葡萄の収穫に沸いている。

羊飼いの娘マリーは、昨夜、昔の恋人ジャックの夢をみて気分が沈んでいる。ジャックは仕事を求めて村を去り、そのまま戻って来ない。マリーは彼を待ちきれず、ピエールと結婚したが、裏切りの気持ちに苦しんでいる。

遠くからジャックの歌声が聞こえる。久しぶりに村に帰ってきたジャックは、故郷の美しい風景に、子供の頃やマリーとの逢瀬を思い出し、感慨に打たれる。

再会するふたり。変わらぬ想いを伝えるジャックに、マリーは自分が他人の妻となったことを打ち明ける。涙するジャック。マリーは自分のジャックへの強い気持ちに気づき、ふたりで村を出ようと言う。

村人たちとピエールが葡萄摘みを終えて戻ってきた。ピエールはマリーへの愛と感謝の言葉を強く語る。村人たちは久しぶりに会うジャックに喜んで声をかける。風車に住む年老いた粉挽きはジャックの名付親。子供の頃からジャックを息子のように愛してきた。ジャックの老母もやって来て、立派になった息子との再会を喜ぶ。歌いながら去る村人たち。そのとき粉挽きの耳に、マリーとジャックの話し声が聞こえる。

第2幕

夕方。葡萄摘みを終えた村人たちが風車の前で「葡萄棚の踊り」を踊る。

人々が去り、ひとり風車の前にたたずむ粉挽き。マリーがやって来るがジャックの姿はまだない。マリーの告白に驚いた粉挽きは、マリーを待たせ、ジャックと話をする。

現れたジャックの心は揺れている。粉挽きは彼をじっと見つめ、人の道と運命を説き、ひとりで村を離れるようにさとす。苦悩するジャック。そこにやってきた母親に粉挽きは、駆け落ちがピエールとその老母にもたらす悲劇を語り、子供の頃からジャックに、良いことをなすように、と教えてきたことを思い出させる。ジャックとの再会も束の間、老いた独り暮らしに戻る辛さを嘆く母親。

教会のアンジェラスの鐘が鳴り、子供の頃からジャックを見守ってきたフクロウが、姿を現す。フクロウの言葉に全てを悟ったジャックは、ひとり村を去っていく。

LE CŒUR DU MOULIN

1^{re} REPRESENTATION SUR LE THÉÂTRE DE L'OPÉRA-COMIQUE
(PARIS, DÉCEMBRE 1909)

Direction de M. ALBERT CARRE

PERSONNAGES

Marie Soprano M ^{lle} B. LAMARE	Jacques Ténor MM. COULOMB	
La Mère Mésa-Soprano BROHLY	Le Vieux Meunier Basse VIEUILLES	
Louison Soprano G. JURAND	Pierre Ténor dePOUMAYRAC	
Le Hibou Soprano X...	Un Vendangeur Baryton VAURS	

"LES SOUVENIRS D'ENFANCE"

La Fée du Blé Soprano M ^{lle} A. GANTERI		
La Fée des Rundes Mésa-Soprano ROBIER		
Le Vieux Mendiant Ténor MM. DONVAL		
Le Homme Noël Basse PAYAN		

Vendangeurs, danseurs, industrieurs, enfants.

Danse des Trelles et du Cheval, réglée par M^{lle} MARIQUITA
Avec la collaboration de M. ROUGIER.

Chef d'orchestre: M. BARBELMANS. — Régisseur général: M. CARBONNE.
Chef de chant: M. MARSON. — Chef des chœurs: M. GEORIS.
Chef machiniste: M. E. RAMELET.
Divers de M. RONSIN.

Costumes dessinés par M. JAU et exécutés par M^{lle} Louise SOLATGÉS et M. Henri MATHIEU.

Projeté de l'auteur: D. de Séverac.
Pour traiter des représentations, de la location de la partition,
des parties de chœurs, de la mise en scène, etc.
l'adresse à MM. ROUGIER, FEROLLE et C^o, 18, Boulevard de Strasbourg, à Paris.

初演のキャスト



初演時の衣装

THÉÂTRE NATIONAL DE L'OPÉRA-COMIQUE (8 Décembre 1909)
"LE CŒUR DU MOULIN" Pièce de M. M. MAGRE — Musique de M. D. de SÉVERAC

Décor de RONSIN

サン＝フェリックス・ロラゲの風景

「セヴラック通信第3号」より再録

サン＝フェリックス・ロラゲはセヴラックの生地です。日本セヴラック協会は、2007年7月にこの地にツアーを行いました。今夏（2016年）に再び開催されるツアーの予習を兼ねて、当時の写真を再録します。（写真 M：松本智勇、K：亀田正俊）



セヴラック生家（手前）とサン＝フェリックス・ロラゲ教区教会（奥） M



広場を見下ろすマリア像 K



M



M

サロン（左）。家族の肖像がたくさん飾られている。セヴラックの書斎（右）父ジェルベールの代にはアトリエだった。



(2)

K



(3)

K

- (1) ピンク色の壁に囲まれた吹き抜けの空間と天窗。
- (2) セヴラックのピアノ。アルベニスに薦められて購入したスタインウェイ。
- (3) 食堂の窓。中世風を模した窓飾りが見られる。



(1)

K



昼食を食べたホテル（上）と料理（右）

K



K



K



M



M

音楽祭の会場（上）は、葡萄酒の倉庫跡。
会場内（下）に仮設舞台が設営され、曲に
合わせてスポットライトが変化する。



M



M

ロラゲ村高台の広場からの眺望（上）と、教会内のオルガン（下）。セヴラックは、父ジルベールから、このオルガンを使って音楽の手ほどきを受けた。

カルカソンヌ

カルカソンヌ Carcassonne は、ユネスコの世界遺産に登録され、フランスの誇る歴史的城塞都市です。今回のツアーでも立ち寄れるかもしれません。



K

K

堅牢を誇ったカルカソンヌ（左）も城門をくぐると、今や土産物屋街（右）と化していた。

セレ

今夏のツアーで最初にコンサートを行う街セレ Cerét は、セヴラックが1910年(38歳)に移住し、晩年の10年間を過ごした地です。ピレネー山脈北麓、スペインとの国境近くに位置します。

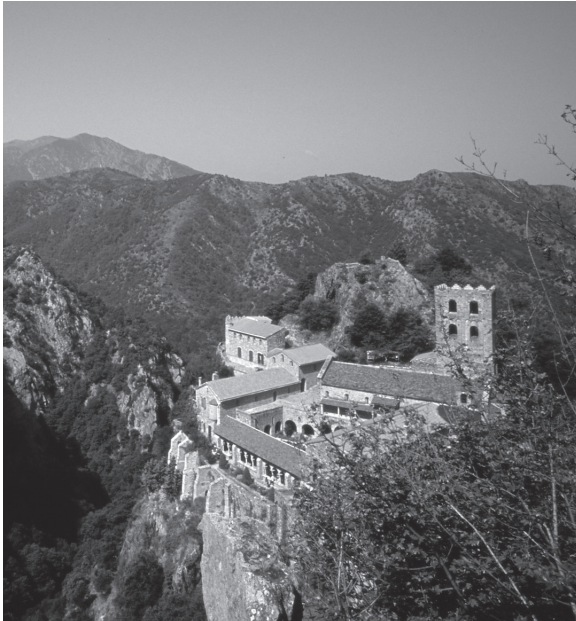
この地から20キロほど西に、カニグー山とサン・マルタン修道院があります。例会で松本智勇さんがこの修道院について素晴らしい講演をされたことをご記憶の方も多いことでしょう。荒れ果てていたこの古刹を復興したのは、セヴラックの叔父でした。

セレは、今日では何よりも、キュービズムの聖地として有名です。ピカソ、ブラック、ハヴィランド、彫刻家のマノロなどの多くの芸術家がこの街に惹かれて移住しましたが、その輪の中心にいたのがセヴラックでした。1950年「セレ近代美術館 Musée d'art moderne de Céret」が設立され、上記の芸術家の作品のほか、シャガールやマチス、グリスやミロなど、この地にゆかりの芸術家の作品を収集し、魅力的なコレクションを誇っています。今回のツアーで必ず訪れたい場所です。

セレのセヴラックの住んだ家は残されていません。しかし通りの名 (Avenue Déodat de Séverac) や学校名 (Lycée Déodat de Séverac) にその名を冠したものがあり、さらに、彫刻家マノロの制作したセヴラックのモニュメントがあります。

またセレはカタルーニャの民族舞踊のサルダーナの国際大会の開催されるところです。街角で見られるなんてことがあるといいですね。 (亀)

サン・マルタン修道院



マノロ制作による
セヴラックのモニュメント



セレ近代美術館



〈連載〉セヴラック随想 (10)

濱田滋郎

ブランシュ・セルヴァのこと その2/作曲家としてのセルヴァ

カタルーニャ系フランス人の名ピアニストで、セヴラックと親交を結び、彼の作品を演奏したほか、彼の没後、その生涯と業績に関する初の伝記を著わしたブランシュ・セルヴァ (1884 - 1942)。その人となり、ピアニストとしての稀に見る天分については、当会報前号に記した。今回は、彼女が後世に遺したレコーディングについて、また、作曲家としての才能も併せ持っていた彼女の、こんにち私たちが知り得る作品 (楽曲) について、いささか記してみることにする。

これは以前にもご紹介したことがあるが、彼女の芸術を記録した貴重な SP 盤レコードは、パリの秀抜なディスク・コレクターだった故ギー・デュマゼール氏の肝煎りにより、〈MALIBRAN-MUSIC〉社により制作されている。いずれも 1928 年から 30 年のあいだに仏 Columbia に録音されたもので、セルヴァの独奏録音は J.S. バッハ《パルティータ第 1 番変ロ長調》、フランク《前奏曲、コラルとフーガ》、そしてセヴラックの《日向で水浴びをする女たち》、組曲《ラングドックにて》より〈祭りの日の畑屋敷をさして〉、組曲《セルダーニャ》より〈リヴィアのキリスト十字架像の前のラバ引きたち〉以上 3 曲。

また、当盤にはセルヴァが好んで共演したカタルーニャのヴァイオリニスト、ジョアン・マシア (1890-1969) とのデュオも含まれ、こちらではベートーヴェン《ヴァイオリン・ソナタ第 5 番へ長調「春」》全 4 楽章と、J.S. バッハの〈アダージョ・マ・ノン・トロポ〉 (これはおそらく、ソナタ類からの 1 楽章と思われる) が聴かれる。マシアは少年期にブリュッセルで学んだヴァイオリニストで、品の良いデリカシーに富んだ芸風を身につけており、セルヴァが共演者に選んだこともよく理解できる。

セルヴァのソロによる演奏に関していえば、バッハはいわゆるドイツ風のいかめしさとか格調とかからは離れ、柔軟で自発性に富んだ趣味の良い演奏。フランクは名品である割には古今さほど名演に恵まれぬ曲という気がするが、セルヴァはたいへん味わい深い弾きぶりを印象づける。そして言うまでもなく、セヴラックの 3 曲、これらは申し分なく素晴らしい。とりわけ〈リヴィアのキリスト十字架像〉、この名曲にはそもそも組曲《セルダーニャ》に関するブランシュ・セルヴァからのうながし——「結びの曲の前に何かもう 1 曲、ゆったりした感じの曲を入れたら？」——に応じて作曲されたという経緯があるだけ

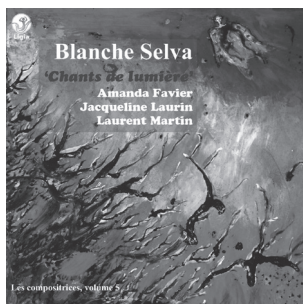


ブランシュ・セルヴァと
ジョアン・マシア

に、とりわけ深い思いを込めたタッチが聴かれるのも当然であろう。

さて、これからは“作曲家”ブランシュ・セルヴァについて述べることになるのだが、じつはこれは、私自身、思いもよらぬ成り行きだった。昨秋のこと、某レコード店で、1枚の素晴らしいCDを発見したのである。〈Blanche Selva〉の文字がまず目について、「おや、これまで知らなかった彼女のピアノ演奏の復刻CDが」と思ったのだが、手にとってよく見ると、そうではなく、彼女の作った楽曲を収めた新録音（制作は2013年らしい）とわかった。開いてみると、“世界初録音”と銘打って、セルヴァが作曲したヴァイオリン（ピアノ伴奏つき）の小品4曲、ピアノのための小品3曲、そしてそれらが主になるのだが、ピアノ伴奏歌曲9曲が収録されている。

収録順に原タイトルとその訳の一覧を、まず掲げてみよう。なお、トラック番号の次の文字は、**v** = ヴァイオリン曲、**c** = 歌曲、**p** = ピアノ曲である。



Blanche Selva

Chants de lumière

Amanda Favier
Jacqueline Laurin
Laurent Martin

〈Lidi0302255-13〉

- | | |
|---|---|
| 1 v Cants de Llum I. Mar i Sol
「光の歌」より I. 〈海と太陽〉 | 9 c Sonet de l'Anima immortal
〈靈魂不滅のソネット〉 |
| 2 v Cants de Llum II. Espia-Dimonis
「光の歌」より II. 〈スパイ＝悪魔〉 | 10 c La Candelora plora 〈聖燭祭の涙〉 |
| 3 c Posta de Lluna 〈月が沈む〉 | 11 c Purissima 〈いとも清き御方〉 |
| 4 c Cap al Tard 〈夕暮れ〉 | 12 c Els Reis
〈王様たち（東方の三博士）〉 |
| 5 c Grill 〈こおろぎ〉 | 13 p Cloches dans la brume
〈霧の中の鐘〉 |
| 6 c Mes de Maria 〈マリア（聖母）の月〉 | 14 p Cloches au soleil 〈陽光の中の鐘〉 |
| 7 v Cants de Llum III. Ametller florit
「光の歌」より III. 〈花盛りのアーモンド〉 | 15 c Rosaire 〈ロザリオの祈り〉 |
| 8 v Cants de Llum IV. Humresca
「光の歌」より IV. 〈ユモレスク〉 | 16 p Paysage au |

まずヴァイオリン曲は、1928～1929年に書かれ、先にレコードのところで述べたヴァイオリニスト、ジョアン・マシアに贈られた小品集〈光の歌〉より。ライナーノート（Florence Launay 筆）によるとこの曲集——カタルーニャ語のタイトルを持つ——は5曲を含むらしいが、ここでは最後の1曲が（その理由は知らず）省かれている。これらのヴァイオリン曲はとても手際よく書かれており、しかも真率な抒情美を湛えている。第Ⅰ、第Ⅲ曲はメロディアスで純朴な魅力に富み、あたかもセヴラックの作品を聴くかのよう。第Ⅱ曲（〈スケルツォ〉との副題がある）、第Ⅳ曲はより活発で、ユーモラスな雰囲気を伴う。

つづいて歌曲8篇のうち、**⑥**〈マリアの月〉は1929年の作で、その8年前に世を去ったセヴラックの思い出に捧げられている。聖母マリアを慕い、讃える詩はカタルーニャの詩人ミケル・フェラ（Miquel Ferrà）によるもの。**③④⑤⑨⑩⑪⑫**の7篇は1935年に書かれ、同じくカタルーニャ語の詩に付曲された。前記フェラのほか、ジョアン・リヨンゲーラス（Joan Llongueras）、ミケル・マランドラス（Miquel Melendres）の詩が用いられているが、いずれの詩にも宗教的な憧憬の念と共に、空、星、光、風、花や緑、小さな生き物など自然の魅力が歌い込まれ、セルヴァはそれぞれにふさわしい、真心のこもる旋律を与えてゆく（いっぽう〈こおろぎ〉などには豊かな機智も覗く）。調性を守りながらも、ピアノ伴奏の書法ともども、十分に新鮮な印象を与える。歌曲のうち最後の1曲（**⑮**）のみは初期、1906年（セルヴァ22歳）の作品で、フランシス・ジャムによるフランス語の詩への付曲。聖母マリアに寄せる美しい連祷の詩で、これをセルヴァに教えたのは、ほかならぬセヴラックだったという。なお、以前にも記した覚えがあるが、同じく南仏に住んだジャムとセヴラックとは気心の通じ合う友人同士であった。

ピアノ曲は、**⑬⑭⑯**の3篇のみだが、それぞれのタイトルが物語るように、大自然のただなかに鳴りわたる鐘の音に思いをはせた楽想は、ここでも、ただちにセヴラックを連想させる。これらは1904年、まだ20歳の頃の作だというが、すでに一家をなした筆致で己の抒情をうたい上げているのが聴かれる。なお、名だたるピアニストであったにしては、彼女の手になるピアノ曲の数はごく少ないのだという。

ところで申し遅れた、このディスクは幸いなことに演奏も素晴らしい。歌手（ソプラノ）のジャクリーヌ・ローラン（Jacqueline Laurin）はカナダのケベック出身。1995～96年頃から数々の国際的コンクールに入賞、主にオラトリオや歌曲の歌手として広く認められた。ケベック出身ということでフランス語はお手のもの、その故もあってか、カタルーニャ語（スペイン語よりフランス語にむしろ近い）の発音も堂に入っている、と聴かれる。どの声域もよくコントロールされ洗練された美しさ、しかも情感の乗せ方がしっくりと板についており、うれしく傾聴した。

ヴァイオリンのアマンダ・ファヴィエ（Amanda Favier）は、生年が記されていないがまだ若いヴァイオリニストで、9歳から公開演奏、13歳でジェラルド・プーレの門に入り、その後イゴール・オジムや故イフラ・ニーマンの教えも受けたという。ライブツイ

ヒのJ.S. バッハ国際コンクールでは史上最年少の優勝者となった。当盤に聴く演奏もたいそう趣味の良いもので、歌心に優れ、この先楽しみな奏者だと思わせる。

ピアノ（独奏および伴奏）のローラン・マルタン（Laurent Martin）はヴェテランの域に入る人で、とりわけ「知られざる作曲家」の作品に意欲を燃やし、たとえばオンスロウ、アルカン、あるいは女性作曲家メル・ボニスの作品などを、CDで世に紹介してきた。彼が醸し出す味わいの深さも、このディスクの値打を少なからず底上げしている。

ブランシュ・セルヴァのように、知られる機会の本当に稀な“作曲家”の作品であればこそ、このように行き届いた演奏により世に広められることは実に喜ばしい。

肝心なことを忘れていた。このディスクの制作は〈Ligia〉というマイナーレーベル（ディストリビューションは Harmonia Mundi）で、番号は〈Lidi0302255-13〉である。なお、片隅に〈Les compositrices, volume5〉とあるので、どうやら同社の「女性作曲家シリーズ」第5集にあたるものらしい。

スコラ・カントルムのダンディの作曲クラスの一コマ。前列の女性がブランシュ・セルヴァ。セルヴァの右隣はルネ・ド・カステラ、さらにその隣にセヴラック。



リレー連載

セヴラックと私

藤田 彩

私とセヴラックとの出会いは、今からちょうど10年をさかのぼる。

現在大学院の修士課程1年生である私が、中学生だった時のことである。幼い頃から毎年参加していた、とあるピアノ・コンクールの課題曲として、セヴラックの《休暇の日々から》第1集より〈ロマンティックなワルツ〉が取り上げられていた。「名前も知らない作曲家」、それだけで私の興味を刺激するには十分であった。知らないことは、知りたくなる——好奇心のかたまりである私にとって、「未知との遭遇」は、「新たな出会い」であった。母に頼んで、すぐに舘野泉先生のCD『ひまわりの海～セヴラック：作品集』と、音楽之友社から出ている赤色のかわいい楽譜を買ってもらった。

〈ロマンティックなワルツ〉を聴き始めたとき、私の心が不思議な感覚に包み込まれていった……。その時初めて彼の作品を聴いたにもかかわらず、またフランスと何の関わりもなかった私が、どこか「懐かしい」と感じる。私はとりつかれたように、CDに収められている作品一つ一つを、何度も繰り返し聴いた。彼の音楽から広がってくる情景や、たくさんの色彩、きらきら光る音の粒たちに、心を奪われてしまった。

その後、高校の普通科へ進学した私は、好きな音楽よりも勉強に時間を取られてしまい、しばらくセヴラックのことを忘れてしまっていたのだが、大学受験で一年浪人していた際、再びセヴラックに出会った。たまたま予備校をさぼって通っていた本屋さんで、椎名亮輔先生の『デオダ・ド・セヴラック 南仏の風、郷愁の音画』が出版されているのを発見したのだ。その時、私のセヴラック熱が瞬間に上がり始め、いつしか「大学生になったら、セヴラックの音楽を研究したい!」と思うようになっていた。

音楽教育学専攻として大学に入学してすぐ、日本セヴラック協会に入会のメールを送り、春の例会に参加させていただいた。まわりにセヴラックを知る人がいない、ということが当たり前であった私にとって、そこは別世界のようにも感じた。「セヴラックの音楽を愛する人が、こんなにたくさんいたなんて!」と驚くとともに感動し、また、舘野泉先生をはじめ、たくさんのすばらしい先生方の演奏やお話をうかがうことができたことはたいへん感慨深く、初めて参加した例会のことは今でも強く記憶に残っている。

また、2014年、《風車の心》の日本上演の際には村人役として、みなさまと一緒に舞台上がらせていただいた。今思い返しても、感動的で、非常に貴重な経験であったと思う。

現在、私は大学院の音楽学研究科に在籍している。

研究の一環として、今年7月の《風車の心》フランス上演にも参加させていただけることになった。セヴラックの故郷を訪ねることは、かねてからの夢であった。「音楽を研究する」ことの難しさに閉口する日々であるが、セヴラック音楽を愛するみなさまと一緒に、彼の音楽を奏奏することができる、またすばらしい時間を過ごすことができる……。そのような機会に恵まれたことを、本当に心から嬉しく思う。

日本セヴラック協会第 24 回例会の報告

鎌田和夫

曇りがちの 11 月 22 日（日）に行われました。荻窪のかん芸館。気温 17 度。立冬が過ぎたにもかかわらず、温もりのある穏やかな日でありました。例会には必ずと言ってもしいくらい、最初に講演が或るのですが、今日は全て演奏会。その生演奏の余韻を壊すことになりそうですが、それぞれの曲に詩を添えました。さっと見ていただければ、その時のおもいが少しは蘇ってくるのではないかと記してみました。

最初は曾田瑞樹さんのマリンバ独奏で、セヴラック《タントウム・エルゴ》を聴いて。「里の中」という詩になりました。

続いて末吉保雄先生の曲《Break Through》を曾田さんのマリンバと末吉先生のピアノで。「出来たての曲でありまして、あまりさらっていませんが、鮮度だけは高い曲です」と末吉先生。「恋の亡霊」という詩になりました。

次に平原あゆみさんのピアノでセヴラック《夾竹桃の下で》を聴いて、「楽しい時」という詩になりました。「セヴラックが亡くなる二年前に出版されました」と平原さん。

休憩をはさんで田口翔さんのピアノでセヴラック《セルダーニャ》から〈二輪馬車にて〉〈祭〉〈遍歴楽師と落穂拾いの女〉の三曲を聴いて、「一滴の水」「陽射し」「覗かないで」という詩になりました。

最後に館野泉先生の登場です。

「今年は 11 月 15 日が日本での最後の演奏になりました。福岡の八女というところでした。それからはピアノに向かっていません。今日までどうしていたかという、ひとり九州を旅してまわりました。とても快適でした。久しぶりの休暇で心地よかったです。すっかり旅人になっていたのです。ですから、本日予定していたユッカ・ティエンスー《Egeiro》はやりません。光永浩一郎《サムライ》を演奏します」と館野先生。

前回に例会でも《サムライ》を弾きましたが、その時とは違った印象がありましたので、また違った詩となりました。すっかり館野先生が素浪人になっていましたから、イメージが膨らみました。

アンコールに梶谷修《祈り》で締めくくりました。

里の中

あなたは優しい人ではなかった
 そうかといつて
 あなたは厳しすぎる人でもなかった
 無視されたまま
 田園の里の中で
 ひとりぼっちだった
 小川が流れ
 きれいな空気を吸い
 ゆったり孤独を愛し
 うつくしい時が流れ
 里そのものに抱かれ
 そんな幸せを
 つまらなく思いはじめ
 里を抜け出した
 あれからのくらの
 過ぎただろうか
 あなたの優しさを
 あなたの厳しさを
 孤独と空気を
 うつくしい時を
 感じはじめていた
 里の幸せを実感し
 私の中にある里の
 あたたかな心を感じ
 里に帰った

恋の亡霊

ここが何処であるか
 自分が誰であるか
 さっぱり判らない
 自分は溶けてゆく
 知らぬ物体となり
 溶けてゆく
 戻りはしない
 以前のようない
 恋にはならない
 破局・破滅・破戒
 破れかぶれになっている
 足が溶けてゆく
 足のない自分は
 手のないことに気付く
 恋の亡霊と
 ダンスをしていた時
 それを知ったのだ
 それでも踊っている
 死の踊り
 呼吸が苦しい
 自分は何処にいるのか
 恋の亡霊は
 私の頭を齧っている
 無感覚のまま
 私に心地よくなってゆく
 さらば亡霊
 恋の女神よ

楽しい時

喜びでいっぱい
 心地よく
 とても楽しく
 とても嬉しい
 この喜びは
 どこから来るのだろうか
 子供たちが
 素足になって
 野原で遊んでいる
 みんな面白そうに
 笑ってる
 みんな楽しそうに
 笑ってる
 ハラの底から
 笑ってる
 ホントにおかしいから
 笑ってる
 でも何処か淋しげ
 うすく笑いながら
 哀しみもあり
 苦しみもあり
 すぐ目の前に
 死があることを
 噛みしめているから
 楽しいのかもしれない
 そんなこと
 子供たちは知らないから
 無邪気に遊んでる

一滴の水

一滴の水が
乾いた石畳の上に落ち
広がってゆく
とどまることを知らず
大きくなってゆく
たった一滴の
水の波紋が
シミとなって
石畳に刻まれる
現金をだまし取られ
大笑いしている老人の
シルエットの不可解さ
一滴の水が
石畳の上で
かろやかに転がり
はなやかな妖精となって
光りかがやき
数滴の水がほしい
そう老人が思ったとき
石畳が野原になった
小高い山に囲まれ
ゆるやかに笑う老人の
おだやかな影があった

陽射し

にぎやかな話し声がする
いっぱい陽射しを浴びた
村の通りには
おしゃれに着飾った
老若男女が
ワイングラス片手に
楽しそうに会話中
ブドウの香りが
甘酸っぱく漂う
空は蒼く澄み
ワルツが流れ
奇声を発し踊る
男女の
調子外れの
ホルンの音が響いた
鐘が鳴る鳴る
鈴が鳴る
赤子泣く泣く
カラス啼く
泣く子はいるか
わらい声と悲鳴と
陽射しの中で
望まれる
あたたかき夢

覗かないで

私のお尻を見てたでしょう
どうしてそんなことするの
私の丰满な胸を見ないで
どうしてお尻が好みなの
私の細くしまった足を見ないで
どうして黙って通りすぎるの
私の締まった腰を見ないで
どうして知らんぷりするの
私のしなやかな背中を見ないで
どうしてそんなに無口なの
私のかろやか髪を見ないで
どうして逃げようとするの
私の長く細い手を見ないで
どうして尻込みするの
私の美しい顔を見ないで
どうして面倒くさがるの
あなたが楽師でなく
画家のミレーであったら
文句は言わないわ
そんな陰気な眼で見ないで
お尻が腐つちまいそうだから

セむらい

ひとりゆく
深きこうべの
笠のゆれ
歩み疲れて
夕焼けの
朱に染まる髪
乱れゆき
虚ろな姿
淋しげに
心に道を
ひとりゆく

歩みゆく
孤独の道を
さりげなく
涙にむせぶ
昼下がりに
通る人なく
畑中を
光りの中に
おもかげの
やさしき影を
歩みゆく

さりげなく
心のうさを
のびやかに
道なき道の
けもの道
目覚めて遠く
はてのなき
油断めさるな
妖艶の
残り香におい
さりげなく

真っ直ぐに
たましいの道
進みゆく
刀を磨き
生命の
尊きちから
さまよえる
冴える心を
やわらかく
ふわり抱きとめ
真っ直ぐに

亡き母に
祈りを捧げ
亡き父へ
祈りを捧げ
亡き友に
祈り捧げん
亡き我は
どこに祈りを
捧げたら
いいのだろうか
神仏に
つかえもせずに
さまよえる
わが仔ヒツジよ
永遠に
さまよいたまえ
祈りたまあえ

仔ヒツジの
霊合ふ心
我が身にも
祈りを捧げ
清めゆけ

祈りたまあえ

セヴラック通信 第20号 2016 前期 日本セヴラック協会 会報

2016年6月25日発行

発行：日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: severac.japon@gmail.com

名誉会長◎カトリーヌ・ブラック・ベレール

顧問◎館野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

事務局：松田純子◎〒247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先：亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: kameyan@jcom.home.ne.jp

印刷・製本：フェデックス・キンコーズ・ジャパン

